

ものである。どこからお化けがでてくるかしれない。このときともされた灯りほど子どもを安心させるものはないだろう。

「ひ」はまた、違った面も持つ。読者は次のような体験をお持ちだろうか。映画館で暗闇に慣れ、夢の世界にひたっていたのに、映画館を出て、突然日の光にさらされたとき、ひたっていた夢の世界がくしゃっとくずれ、現実の世界に引き戻された、という体験である。この場合の「日」は、暗闇から守ってくれる「灯」に比べ、あまりに現実的で暴力的でさえある。

このように「日、灯」と「闇」は対照的なものであるが、お互いに深いかかわりをもっている。私たちの毎日は、朝日がのぼることで始まり、夜を迎えて終わる。一日の中に、日と夜、明るいものと暗いものがあることを、私たちは、毎日の体験で知っている。そのような日と夜の対照は、私たちの根源的な生活のリズムとなっており、人間の心の深いところ

ろにあって、心の成長を促す根源的なイメージとなっている。それらは、対立したり敵対したり、補いあったりして、私たちの心の成長に大きな役割を果たすのである。

私たち心理療法家は、心の働きを表すものとして、よく神話や物語をモデルにとる方法を用いる。ここでも、心の成長に対する「日、火、灯」の役割をのべるために、その方法を用いてみたい。

まず思い浮かぶのは、ギリシャ神話『アモールとプシケー』の、プシケーのともした「灯」である。プシケーは、その美しさ故、夫に請われ結婚し、幸せな結婚生活を送っていた。ところが、ある日、夜毎訪れる夫の顔を見ることがないのを疑問に思いだす。そしてついに、灯をともして、暗闇の中の夫の顔を見るのである。正体を見られた夫は失望して去ってしまう。その後、プシケーは、数知れぬ困難や試練をくぐり抜け、やり遂げることで、夫の愛を

『こわれた腕環』がそれである。主人公アルハは、将来名なきもの（神々）に仕える大巫女となるべく、神殿に連れてこられる。神殿の地下は迷宮になっていて、暗闇、夜の支配する世界となっている。迷宮の中には秘宝もあるのだが一切が闇の中に閉ざされ、時間も止まったままである。アルハは、黒い服を着て、将来期待された役割を担うべく毎日何も考えず必要なことだけをして、変わることはない日々を繰り返している。

ところが、ある日、その地下の迷宮に、男が入り込んでいるのを見つける。男は、その先から火を発する杖を持っており、その火で洞窟を照らしている。アルハは、驚き、侵入されたことに対して激しい怒りを覚える。しかし同時に、強い好奇心も抱く。この男は何をしにきたのだろう。あの「火」は何だ。あの「火」で一度、今まで見たことのないこの洞窟のきらめきを見てみたい。

アルハは好奇心にうちかかず、その男と交渉を持

ち始める。ある日、男はその杖の火を燃やしてアルハを照らし出し、衝撃的なことを口にした。「あんたにあんた自身の姿を見せてやったのさ」。そして、アルハというのが、本当の名前でないことを告げ、本当の名前を取り戻し、この闇から日のあたる世界へ出ていかないと誘ったのである。アルハは迷う。日のあたる世界とはどんな世界だろうか。果たして自分はその世界でやっていけるだろうか。その男を生かすも殺すもアルハ次第である。しかし、アルハにはどうしてもその男が殺せず、闇と火の間で激しく揺らぐ。そしてついに、アルハは日の世界に出ていく決心をする。二人は闇が迫ってくるなか、男の照らす杖の火を頼りに、迷宮を抜け出る。二人が抜け出たとき、迷宮は音をたてて崩れ去る。

この物語で心を打たれるのは、男の持つ杖の火が消すか、燃やしたままにするか迷い、闇と火の間で揺らぐアルハの姿である。男を殺すのは簡単である。でも何故か殺せない。かといって、今まで安穩

ろうか。心の成長は、火と闇の対立や矛盾を内に孕んで進んでいくものである。女性にとり、本当の自分を求め意識の灯をかかげて生きていくことは困難な道程である。プシケーやアルハの歩んだプロセスは、女性の自立を云々するなら、それは内面的な裏づけを伴わなければならないことを教えてくれている。



*エリック・ノイマン、『アモールとプシケー』、河合隼雄監訳、紀伊国屋書店
*ルゥグイン、『こわれた腕環』、ゲド戦記2、清水真砂子訳、岩波書店

(京都大学教育学部心理教育相談室)